

# 初期導入ゼミ実践に求められる 「標準化」と「入学前教育実践」について

山 田 千香子 (代表)  
綾 木 歳 一  
西 村 千 尋  
新 川 本

## 目 次

はじめに

第1章 導入教育が必要とされる背景

第2章 研究課題と実施内容

第3章 「標準的教育内容」とは

第4章 入学前教育のすすめ

おわりに

資料

## はじめに

大学教育は高校までの教育とは違って、自分で学習することに重点がおかれている。単位の認定一つをとっても、授業時間中の学習だけが大学の学習内容なのではない。講義や演習の内容を十分理解するためには、図書館などに足を運んで自分で調べる必要がある。大学では、そのような自学自修の時間を含めて単位を認定している<sup>1)</sup>。その意味で大学とはまさしく「自ら学ぶ」ところなのである。こうした点からも、大学における学習支援の基本は、学生の主体的活動と自己陶冶の機会を大学が十分に用意することであろう。とくに教育的観点から重要なことは、入学後の早い時期

に、大学教育へのオリエンテーションを含め、高校教育との接続、自主的学習への動機づけ、専門教育へ向けた学習への動機づけなどを推進することが求められる。

初期導入ゼミにおいて必要な学習支援体制とは、教員と学生が親しく対話を重ね、学生に対して積極的な学習参加を促し、大学での基本的な学習習慣の確立、適切な自己表現能力の育成、さらに、学問のおもしろさや知的好奇心を育てるような体制を創りあげることが急務と考えられる。まず、学生側には高校時代の受動的学習態度からの脱皮をはかることが必要である。言い換えるならば、「暗記型」学問から「探求型」学問への転換である。高校までの「学習指導要領」に盛られる情報は増大の一途をたどり、覚えるべき知識量は膨大なものになってきている。勢い「暗記主義」「注入主義」が高校までの教育の支配原理になり、創造的に考える教育などは実質的に求められてこなかったという背景がある。大学において重要なのは「知識」の暗記力を訓練する教育よりも、「思考力・創造性を重視する教育」といえる。「探求型」学問とは、未解明の問題について独自の問題意識をもとにテーマ設定を行なって、そのテーマに関連する問題や事実を自分なりに調べ、追求して考えを深めていくという学習のスタイルをいう。つまり、新しい情報を収集し、分析し、新たな方向を模索していける能力を培うことを目標としている。大学は自立した人間として知的に生きていくのに必要な学力、認識力を形成する場であり、それが今日の教育に強く求められている。

以上のように、明らかに高校までの勉強と大学の学問は質的に異なるため、その学び方についてはゼロから学ぶ必要があり、その場として設けられたのが初年次教育、初期導入ゼミとしての新入生セミナーである。

初期導入ゼミにおいては、各教員による特色・個性あるゼミが前提とされるにしても、大学全体としての成果を期待するには、新入生に対して前述したように教育的観点から抑えるべき基本的内容や事項を整理・把握しておくこと、つまり「標準化」が求められる。本稿は、こうした「標準化」

すべき内容について多くの先進事例から学び、検討を加えてきた経過とその成果についてまとめたものである。

さらに、円滑な高校－大学間の連携を構築し、入学生に対する大学教育へのオリエンテーションを効果的にするためのもう一つの具体的教育研究試みとして、「入学前教育実践」の検討とその試行に取り組んできた。本稿は、その成果報告も加えてまとめたものである。

## 第1章 導入教育が必要とされる背景

導入教育が必要とされる背景には、次のような大学を取り囲む今日的な社会状況が挙げられる。現在、大学は18歳人口の半数が大学進学するという急速な大衆化段階を迎え、今後、一段と加速するのは回避できない状況にある<sup>ii</sup>。大学教育の大衆化によって、学生の資質は学問への好奇心、学習力、学力、授業でのやる気など、総じて多様化するとともに、カリキュラムとの分離の度合いを深め、学習力や学力が低下傾向を示しているのは否めない事実である。「学習力」が欠如し、何を学習するかという肝心の意欲や士気が乏しくなっているため、教員の側には「学習力」そのものをいかにして開発するかが要求されている。

入学生の学習履歴も多様化している。たとえば、経済学や社会学などを学ぶにしても、日本史・世界史をちゃんと学習していることは必須条件であるが、ほとんどの学生は不十分にしか学んでいない。とりわけ「戦後の歴史」の部分は抜け落ちていることが多い<sup>iii</sup>。授業が理解できない学生が増え、教員の側に相当な努力が不可欠となっている。学力の多様化・低下現象を克服し、学力の水準向上を達成すると同時に、学生も教員と同様にカリキュラムの理念・目的・目標の共有化の達成が課題となっている。しかしながら、一人一人の学習者は成長発達の相違を反映して、様々な個性を持つ以上、従来のような一律の一斉教育では、その種の個性を開花させることはできない。入学の時は仮に偏差値が低い学生でも、その才能が十

分開花され、学習力が醸成され、卒業時に大きく学力が進展するようなカリキュラム構想と教員の「教育力」が求められているのである。その目標達成のための第一歩に位置づけられるのが初期導入ゼミとしての新入生セミナーである。

## 第2章 研究課題と実施内容

### 第1節 研究課題

研究課題として「新入生が大学教育を受けるに当たって初年度に確立すべき基本項目、そのための教員側の支援方法を『標準的教育内容』として設定し、特色あるゼミ実践展開が図れる方法を開発研究し提言へ結びつけることを目的とする」を中心に据えた。この課題アプローチのための具体的方法として、まず多くの先進事例資料の収集と調査を下記の手順に基づいて進め、分析を行った。

### 第2節 実施内容

#### (1) 先進事例収集

- 1) 各大学HPへのアクセス等によって全国の先進事例（入学前教育・初期導入ゼミ実施校）の抽出及び訪問校選択する。
- 2) 先進校訪問：各大学独自の取り組みについて、担当者に面接のうえ導入の経緯・直面した問題・方法論、工夫・特色・実践効果等について実際の現場の声を把握する。
- 3) 収集した先進事例について理論的・実践的な分析を行う。

#### (2) 先進大学訪問とその成果

各大学への質問項目は、以下の通りである。まず、①初期導入ゼミ実施（有・無）について、次に「目的・方法論」に関連した下記の内容について伺った。

初期導入ゼミ実践に求められる「標準化」と「入学前教育実践」について

- 1) 初期導入ゼミは必修？ or 選択？（その理由と単位配分）  
必修の場合：単位認定「不可」の場合の措置
- 2) クラス編成について（学生の自由選択 or 割り当てクラス編成）
- 3) ゼミ授業評価について（学生側&教員側の評価は？）
- 4) 大学の取り組み方（教員全員 or…，その理由）
- 5) 担当教員数（上記4の設問と関連して…）
- 6) ひとりの教員が担当する学生数（その理由）
- 7) クラス担任制との関わり
- 8) 共通指導内容
- 9) 担当されて良かったと思われる点
- 10) 担当されて改善を要すると思われた点
- 11) 初期導入ゼミで少なくとも最低限必要だと考えられる指導内容・項目

## 資料 1

### ◇訪問および電話等によって調査した先進大学一覧

- |           |          |             |
|-----------|----------|-------------|
| 1. 新潟大学   | 2. 筑波大学  | 3. お茶の水女子大学 |
| 4. ICU    | 5. 京都大学  | 6. 京都文教大学   |
| 7. 横浜商科大学 | 8. 長崎大学  | 9. 熊本大学     |
| 10. 広島大学  | 11. 大分大学 | 12. 東北大学    |
| 13. 岩手大学  | 14. 和光大学 | 15. 日本大学    |

上記の調査結果は、別表1～15の通りである。

調査項目	別表 1		別表 2	
	新潟大学	備考	筑波大学	備考
	経済学部	調査実施期日 8月18日	社会学類	調査実施期日 8月13日
① 大学の 取り組み方	教員全員 (学部ごと) ローテーション制	(前期・後期で交替)	教員全員 (学部ごと) ローテーション制	6～7年ごとの担当
② 名称	新生ゼミ		フレッシュマン・ セミナー	
③ 必修 or 選択	必修	必修の場合 単位認定不可の措置の対応 再履修は2年生終了までに 取る	必修	
④ 単位数 (通年・半期)	2 + 2 (前期+後期)		1単位 前期のみ	3学期制 4 / 5 / 6月の計10回
⑤ 評価方法	(通常評価) A・B・C・D		履修したか否か	
⑥ ゼミ学生数	20名 18名+2 (他学科から)	*多い場合WEB上で 抽選	26～27名	
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択		学生が希望クラス選択	
⑧ クラス担任制 との関わり	*アドバイザー制度 あり	入学時点で機械的に 割り振る	担任制は 4年生までもちあがり 3・4年は 専攻ゼミ中心	20人～40人担当
⑨ シラバス	有		有	フレッシュマンセミナー ガイドライン (立派な冊子)有り
⑩ その他・ 収集した参考 資料等	・大学案内 ・シラバス		・大学案内 ・シラバス	

(注) ■■■■ は各大学の特色

何をやるか (先生によって個人差は大きい)  
 つくばについて  
 ・大学全体への導入と位置づけ  
 ・レポートのノウハウ  
 ・論文の書き方  
 ・図書館の使い方  
 ・生活面の健康・安全に対する意識の覚醒

初期導入ゼミ実践に求められる「標準化」と「入学前教育実践」について

調査項目	別表 3		別表 4	
	お茶の水女子大学	備考	ICU	備考
	全学 ・入学後1泊2日の研修有り	調査実施期日 8月10日	全学	調査実施期日 8月10日
① 大学の 取り組み方	教員全員(学科ごと) ローテーション制	(前期・後期で交替)	英語教育プログラム ・学びの準備をさせる	
② 名称	新生ゼミ		Freshman component	
③ 必修 or 選択	必修		必修	
④ 単位数 (通年・半期)	2 (前期 or 後期)		計18	
⑤ 評価方法	通常評価		通常評価	
⑥ ゼミ学生数	20名	*多い場合抽選	20~25名	
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択	専門とは違うものを選択 ・所属学科の教官を 第一希望とできない	プレースメントテスト 実施 ・能力別クラス	
⑧ クラス担任制 との関わり	1年~4年まで	入学時点で機械的に 割り振る	アドバイザー制度 ・1年の時に専門 関わりなく	卒論のための アドバイザー ・学生が希望する
⑨ シラバス	有			
⑩ その他・ 収集した参考 資料等	・大学案内 ・シラバス		・大学案内 ・シラバス	

・通常評価 内容  
A~Fまでの評価を指す 教養的なものが中心  
名著古典など様々

調査項目	別表 5		別表 6	
	長崎大学	備考	熊本大学	備考
	全学部 平成14年度から	調査実施期日 11月10日	全学部 平成5年度から	調査実施期日 資料から
① 大学の 取り組み方	教員全員(学部ごと) ローテーション制		教員全員(学部ごと) ローテーション制	
② 名 称	教養セミナー		基礎セミナー	
③ 必修 or 選択	必修		必修	
④ 単位数 (通年・半期)	2 (前期)		2 (前期・後期)	後期開講は前期で単 位取得ができなかつ た学生への対応
⑤ 評価方法	通常評価		通常評価	
⑥ ゼミ学生数	約10名		20名	
⑦ クラス編成の 方法	機械的な輪切り方式	学部混在型	学生が希望クラス選択	学部混在型
⑧ クラス担任制 との関わり				
⑨ シラバス	全体総括のシラバス	教員用ガイドライン 学生用ガイドブック	担当教員ごと	
⑩ その他・ 収集した参考 資料等	・大学案内 ・シラバス	テーマの設定は、ゼミ 全体で話し合い学生が 決めていく方法をとる		



初期導入ゼミ実践に求められる「標準化」と「入学前教育実践」について

調査項目	別表 7		別表 8	
	広島大学	備考	東北大学	備考
	全学部 平成9年から実施	調査実施期日 資料から	平成14年度から実施	調査実施期日 資料から
① 大学の 取り組み方	教員全員(学部ごと) ローテーション制		全学出動体制	
② 名 称	教養ゼミ		基礎ゼミ	
③ 必修 or 選択	必修		必修	
④ 単位数 (通年・半期)	2 (前期)		2 (前期)	
⑤ 評価方法	通常評価		通常評価	
⑥ ゼミ学生数	10~12名		20名以下	
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択	学部単一型	学生が希望クラス選択	学部混在型
⑧ クラス担任制 との関わり				
⑨ シラバス	全体総括のシラバス	教員用:ガイドライン作成 学生用:ガイドライン作成	基礎ゼミシラバス	担当予定教官FD毎年開催 学生用:基礎ゼミの手引き
その他・ ⑩ 収集した参考 資料等				

調査項目	別表 9		別表 10	
	京 都 大 学	備 考	京都文教大学	備 考
	全学部	調査実施期日 11月2日	全学部	調査実施期日 11月2日
① 大学の 取り組み方	教員全員 (全学部)	全学共通科目 *異なる専門分野の 教員と接すること により視野を広げる	教員全員 (全学部) (担当授業数により調整)	学部共通科目
② 名 称	ポケットゼミ	平成10年度から開講 平成16年度： 138科目開講	初年次演習	
③ 必修 or 選択	選択	履修は1年次のみ	必修	単位取得できなかった時 次年度再履修
④ 単位数 (通年・半期)	2 (前期)	卒業科目 (自由選択科目) *但し法学部のみ非認定	2 (前期)	
⑤ 評価方法	通常評価		通常評価	
⑥ ゼミ生数	10名	担当教員選抜の場合 ・文系・理系から半々ずつ	20名	
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択 第1～3まで希望提出	選抜の仕方 ・無作為抽選 ・担当教員の選抜	学生が希望クラス選択	・ばらつきの調整を行う
⑧ クラス担任制 との関わり	・医学部 (保健科) ・理学部 以上2学部が担任制実施	入学時点で機械的に 割り振る	ナビゲーター制度 (1年次のみ)	・学生が希望できる ・1ヶ月かけて研究室訪問 ・担当学生100名～10名
⑨ シラバス	有	内容はすべて教員に 任せる	無	内容について 共通事項有り
⑩ その他・ 収集した参考 資料等	・大学案内	ポケットゼミは担当 コマ以外の部分で、 教員のボランティア に該当する	・大学案内 ・大学履修要覧	

初期導入ゼミ実践に求められる「標準化」と「入学前教育実践」について

調査項目	別表 11		別表 12	
	横浜商科大学	備考	大分大学	備考
	全学部	調査実施期日 6月1日	経済学部	調査実施期日 9月18日
① 大学の 取り組み方	教員全員（学部ごと） ローテーション制		経済学部教員全員	
② 名称	基本ゼミ		基礎演習	
③ 必修 or 選択	必修		必修	必修の場合 単位未修得者への対応： 2年生前期に再履修
④ 単位数 (通年・半期)	4 (通年)		2 (前期)	平成17年度から通年化 但し、単位未修得者へ の対応は検討中
⑤ 評価方法	通常評価		レポート、平常点	
⑥ ゼミ学生数	20名	*第3希望まで申請し 調整	16名前後	21クラス
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択		学生希望 (第1～第3希望)	
⑧ クラス担任制 との関わり	*アドバイザー制度あり	入学時点で機械的に 割り振る	無し	基礎演習で対応
⑨ シラバス	有り		有り	
その他・ ⑩ 収集した参考 資料等	・大学案内 ・シラバス		・履修の手引き ・シラバス	

		別表 13	
		岩手大学	備考
調査項目	人文社会科学部	調査実施期日 8月3日	
① 大学の 取り組み方	教員全員 (何年間かのうちに必ず担当する)	学部で編成	
② 名称	基本ゼミ		
③ 必修 or 選択	必修	必修の場合 単位認定不可の措置の対応 再履修	
④ 単位数 (通年・半期)	2 (半期)		
⑤ 評価方法	各教員に任せる	全体評価は別途行っている	
⑥ ゼミ学生数	10名前後 (上限15名) (5名以下は不開講)	多すぎるのはゼミとしてふさわしくない 2～3回かけて調整	
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択		
⑧ クラス担任制 との関わり	クラス担任はあり (担任・副担任)	相談窓口として機能 (1～4年まで)	
⑨ シラバス	有		
⑩ その他・ 収集した参考 資料等	「基本ゼミ」の手引き(2003-2004年度) ・基礎ゼミ履生の経緯とその評価(2002年3月) ・大学の初期教育について (平成13年度ファカルティ・ディベロップメント報告書)	担当の仕方など 資料(冊子)を作成(実現)	

初期導入ゼミ実践に求められる「標準化」と「入学前教育実践」について

調査項目	別表 14		別表 15	
	和光大学	備考	日本大学	備考
	経済経営学部	調査実施期日 10月9日	経済学部	調査実施期日 5月29日
① 大学の 取り組み方	教員全員（学部ごと）	現在、半数の教員が 担当 毎年、2、3名ずつの 入れ替え	教員全員（学部ごと）	
② 名称	プロゼミ		フレッシュマンセミナー 現在は3泊4日の合宿 形式	来年度より初期導入 ゼミの単位化に伴い、 廃止。
③ 必修 or 選択	必修	再履修	必修	
④ 単位数 (通年・半期)	4 (通年)			来年度より単位化予定
⑤ 評価方法	通常評価			
⑥ ゼミ学生数	約20名		20名	
⑦ クラス編成の 方法	学生が希望クラス選択	希望者多数の場合抽選	学籍番号順の輪切り	
⑧ クラス担任制 との関わり	プロゼミ担当教員		クラス担任	
⑨ シラバス	有	web 上で公開	無	
⑩ その他・ 収集した参考 資料等				

プロゼミ教員

共通認識

コアティーチャーとして  
4年間受け持つ  
年に会合を開いて検討  
する読み・書き・情報  
検索の力

調査対象の先進大学15大学の状況について、調査項目別に整理してみる。まず、①「必修 or 選択」については必修としている大学が14大学である。一大学(京都大学)のみ選択としている。必修の場合、単位認定不可の措置の対応が必要となるが、新潟大学は「2年生修了までに再履修」することを義務づけている。②教員の取り組みの体制としては、ローテーション制を採りながら全学的に対応しているところが多い。③単位数は1単位から4単位までと広がるが、多くが2単位(前期)と位置づけている。④評価方法は通常評価が14大学で、1大学が「履修したか否か」という方法であった。⑤ゼミ学生数は平均して10~20名である。その中で筑波大が最も多く26~27名である。⑥クラス編成方法は、学生が希望クラスを選択(第1~第3希望)し抽選等によって決める形式が多い。その際に学部混在型が目立つ。お茶の水女子大の場合は、専門とは違う分野の選択が義務づけられており、所属学科の教員を第一希望とはできないシステムを採っている。⑦担任制が実施されている大学は10大学であった。その多くが新入生ゼミを担任クラスとはせずに、別途担任制を採っている。入学時点で学生番号等から機械的に割り振り、クラス編成をしている。筑波大学では一人の教員が1年から4年までの持ち上がり形式で担当している。

### (3) 本学学生および教員へのセミナーアンケート調査の実施

平成16年度実施した授業評価を活用し、学部2年生および3年生に対して、前年度あるいは前々年度に受けたフレッシュパーソン・セミナー<sup>v</sup>で学んだことが、その後の学習活動にどのような影響を与えているかを知るため、また、担当した教員の意見を収集するために「フレッシュパーソン・セミナーアンケート調査」を実施した。その結果について分析・考察し、初期導入教育での「標準的教育内容」についての検討を加えた。

#### 1) セミナーを受講した履修学生の感想

上記の調査結果は<資料4>の示す通りである。履修学生・教員の

全体結果をみると、「総合的に見てフレッシュパーソン・セミナーは有益であった」という肯定的回答<sup>vi</sup>が高く（学生86.8%，教員100%）、注目すべき点である。研究の出発点としての「初期導入教育の必要性」について確認できる回答内容といえるのではないだろうか。そのなかでも、とくに履修した学生の満足度が高い項目について、高い順からあげるならば、以下ようになる。

1. 「自ら調べて学ぶ機会があった」  
(学生：93.6%，教員：100%)
2. 「プレゼンテーションの機会があった」  
(学生：84.7%，教員100%)
3. 「教員と授業内容についての話をする機会があった」  
(学生：78.2%，教員：100%)
4. 「学内施設（図書館等）を活用する資料収集方法を学ぶ機会があった」  
(学生：76.2%，教員：90%)
5. 「他者に対する態度を養う事ができた」  
(学生：72.2%，教員：87.5%)

上記項目1～3においては教員側が100%達成と認識しているにも拘わらず、学生側はそうに受け取っていないという認識のズレが若干存在している<sup>vii</sup>。なお、逆に満足度が比較的到低い（といっても満足度は50%以上を示しているが）項目をみてみよう。

「人生観を育むことができた」 (学生：54.2%，教員：90%)

上記8の項目についての捉え方としては、セミナーの最終的課題あるいは到達目標として「将来設計について考え、人生観を育む…」ということであって欲しいと期待するものであるが、具体的にどのように取り組ん

だらよいのか教員側も難しい。どう講義を聴くか、どうノートを録るか、といった具体的スキルの点については学生もつかみやすいと言える。しかしながら、それは、あくまでも人生観や将来設計のようなものが背景にあって、そこに取り組むやり方が大切であろう。そのような点についても、セミナーをより良くしていく為の今後の課題と考えられる。

2) 教員による感想：

セミナーを担当しく良かったと思われる点>

<改善を要すると思われた点>

ここでは、担当した教員が挙げる<セミナーを担当し良かったと思われる点>、および<セミナーで改善を要すると思われた点>について自由記述回答からの抜粋を紹介したい。

下に挙げた項目は、とくに共通性が見られたものである。ここに出された項目については、次章で扱う「標準的教育内容」につながり概ね反映されている。

<フレッシュパーソン・セミナーを担当し良かったと思われる点>

- ・学生たちはそれぞれ大学生活（学習・プライベートな生活など）についての不安を抱えながら入学してきている。セミナーは学生生活をスムーズにおくれるようにすることの手助けになってきている。少なくとも学習面でのつまずきはなくなると考える。
- ・大学生活について具体的イメージを持って過ごすことができるようになったのではないかと考える。
- ・自分にとっては最近の若い人の考え方に接する機会を持てること、学生にとっては年寄りの話を聞く経験が持てること。
- ・若者気質に触れられたこと。
- ・大学教員とはどのようなものか、学生が知る手がかりになったのではないと思われる。



- ・1年生にとって他府県からくる友達と接する機会ができ同じ学年同士での対話ができただこと。
- ・双方向授業がある程度実現できた。
- ・時事的なテーマについて学生同士意見を述べあうことにより、自分の考えを見つめ直すきっかけになったと思う。

#### <フレッシュパーソン・セミナーで改善を要すると思われた点>

- ・発表の学生は一生懸命調べて発表するが、残りの学生はその間あまり積極的とは言えない。
- ・大部分の学生がWEBで調べて済ませようとする。
- ・インターネットを活用した資料収集法を教えると、十分に内容を吟味せず、引き写しに近い資料報告をする学生がいるので、パソコンのある教室で指導する時間の必要性も感じている。
- ・1ゼミ当たりの人数…1年生ということを考えると少人数が望ましい。
- ・ここ数年間セミナーを担当して感じることは、受講生数は15名以下（可能であれば10名以下）にすることが望ましい。学生によるプレゼンテーションはともかく、その後のゼミ生同士の討論が、人数が多いと十分にできない事が多いからである。もちろん、教員の力量の問題があることもその要因の一つであるため、担当教員の交流も必要と思われる。
- ・学習効果を考えた場合、半期では不十分であろうと思われる。
- ・夜更かしによる朝寝坊や朝食をぬいている学生への対応が不十分。
- ・ゼミ以外の履修科目がバラバラなので、ゼミ以外での仲間づくりや授業出席へ向けた相互協力が行いにくい。
- ・レポートに関して過大な要求をし過ぎたのか、何人かの学生が途中でゼミを放棄したこと（私としては過大だとは思っていないのだが）。
- ・各人の悩みを聴いたりすることが少なかった。
- ・意見発表の苦手な学生が必ずいる。ディスカッションの時、教師の扱

いに不公平感を抱いているのではないかと不安に思うことがある。か  
とって、声をかけても意見がすぐに出ないので、次にふることにな  
ってしまうのだが…。

＜フレッシュパーソン・セミナーで少なくとも最低限必要だと考えられ  
る指導内容、あるいは指導項目＞

- ・大学の授業における履修方法や科目履修の具体的設計を、個別に指導  
する必要がある。
- ・学生の将来設計にあわせた科目の履修相談。
- ・分野によって考え方が異なると思うが、最低限小さなテーマについて  
文献で調べて、レポートにまとめて、更に人前で自分の言葉で説明す  
る練習は必要である。
- ・いわゆる講義形式は避ける方が良いと思われる。例えば、学生に対し  
課題を与え、レポートを提出させるといった方法が有効。
- ・高校までの学習方法と大学での学習の違いを理解させる。
- ・自ら何事においても行動しないと大学生生活は進んでいかないというこ  
と。
- ・学生生活の指導（朝起きられなくて遅刻する学生が2割程度いる。）
- ・大学生活における学びのあり方（代返、遅刻、居眠り、私語など）等  
についての学生同士での討論。
- ・悩みを語り合える雰囲気作り（場の設定）。
- ・学内施設の活用方法。
- ・図書情報センターの利用の仕方。
- ・情報収集の方法。
- ・プレゼンテーションの仕方。
- ・レポートの作成方法。
- ・レポート等における文献引用の方法。
- ・レポートの書き方（テーマの建て方、調べ方、まとめ方、発表の仕方  
等）

- ・講義の受け方・ノートの取り方。
- ・学生同士の討論，ワークショップ的なこと。
- ・本音で話し合えるような場の設定。
- ・グループ研究。

### 第3章 「標準的教育内容」とは

本章では、第2章の先進大学の事例，および本学でのアンケート調査結果から得られた事項から、標準的教育内容について検討しまとめていくこととする。さらに、その過程での知見から実施体制についての提言を述べたい。

#### 第1節 標準的教育内容項目（共通指導項目）について

- (1) 大学で学問を修めるための道筋，方法を習得するための足がかりを教える

大学での学習の入り口として、学生と教員及び学生相互のコミュニケーションを図り、グループ作りに役立てる。高校教育までの学習方法からの転換を図り、知的好奇心に富んだ主体的な勉学姿勢の基盤を培うためには、<大学で学ぶとはいったいどういうことか>という問題について、教員と学生がともに考える場の設定が必要とされる。

#### ●履修指導

- ・大学の授業における履修方法や科目履修の具体的設計を個別に指導。
- ・学生の将来設計にあわせた科目の履修相談。

※提案：履修指導を初期導入ゼミの冒頭部分で行えば、オリエンテーションの効率化も図られると考えられる。

- (2) 新しい環境適応へのサポート

生活の変化としては自宅から離れての一人暮らし等がスタートする

際に、新しい環境への適応に支障を生じるケースもみられ<sup>iii</sup>、きめ細かな生活指導の必要性が求められている状況にある。また、別な面では、基本的な生活習慣の乱れが身体的な面のみならず、心理面においても様々な問題を惹起することもあるため、メリハリのある生活習慣の確立のためのサポートが必要となる。

●「基本的生活習慣の確立」サポート

※提案：前期のゼミ配置として基本的生活習慣の確立からも1限時に設定し、後期は学外活動の実施等も射程にいれ、5限時の設定が考えられる。

(3) 学内施設の活用方法（施設見学と場所確認）

※提案：キャンパスツアーを新入生セミナーの早い時期に行い、大学生活への円滑な第一歩となるよう支援していく。

(4) テーマ設定の仕方について学ぶ

高校までの一方向からの授業から双方向性の授業へ、与えられた問題を解くことから自分で問題を見つけて調査し解決する課題へと、テーマに沿って学生自らが調べ、発表して討論を行い、高校までとは違う勉学の方法や姿勢を身につける。大学では、学生の内発的学習意欲がもっとも重要であり、自主的学習への動機づけの推進が求められる。この学習への動機づけは深く学生の自己や人生に関わってくる問題であるだけに扱いが難しい。そして、それがすぐに育成されるわけではない。まず、そのための方法や手順を、初期導入ゼミを契機として確実に身につけていくことであろう。

●問題意識または問題点の分類と整理の仕方を理解させる（アイデアの拡散と収束の方法）

(5) 文献資料の検索と収集方法（図書館の使い方など）の習得

<資料の検索・収集法を理解させる>

- 図書情報センターの利用方法をはじめとして、Web利用する際の基本的ルール等を理解させる<sup>ix</sup>。
- 情報処理センターの利用方法<sup>x</sup>（パソコンの使い方、ネットへのアクセスの仕方）。

※提案：図書情報センター検索ツアーを新入生セミナーの早い時期に実施し、自主的学習活動への導入を図る。

(6) プレゼンテーションの仕方、ディスカッションの仕方、文章の書き方（レポートの書き方・論文の書き方）を習得させる。

初期導入ゼミには、討論の方法、レポートの書き方等が必ず含まれること。大学4年間での学びの基礎となる「ラーニング・スキル」や「リサーチ・スキル」の理解と、具体的なスキルの初歩を獲得していくことが求められる。このような演習を通して、具体的に大学で学ぶ動機づけを行うとともに、学科ごとの総合セミナーとの綿密な連携と接続を図り、大学での学びの基礎を築く。

- 読み・書き・聞く・話すことの徹底
- 読解力、文章構成の研磨、発表力、討論の方法などの習得
- レポートと口頭によるプレゼンテーションとディスカッションを通じて適切な自己表現能力を育てること。

## 第2節 初期導入ゼミ実施体制についての提言

(1) クラス編成について

初期導入ゼミのクラス編成においては、学生が大学生生活初期の段階で幅広い交友関係を築くチャンスとしても、学科の壁を低くしたクラス編成が望まれる。

(2) 一教員の担当ゼミ学生数について

本学の学生・教員へのアンケート調査、および、先進大学の状況、さらにこれまでの学生満足度調査等<sup>xi</sup>から考えて、最も望ましい新入生セミナー人数は①10名前後と考えられる。②1～5名までは少なすぎる。③15～20名は多くて不満を感じている者が多い。10名～15名あたりの人数におさえることができれば、ゼミは多面的に、かつ効率的に運営できるのではないだろうか。すでに本学調査でも20名以上の場合は学生側の不満が出ることが指摘されている。その理由としては、プレゼンテーションの機会や学生同士のディスカッションが充分でなくなる等があげられている。教育効果からも、さらに学生・教員双方の満足度につながるためには、適正な数で初期導入ゼミが構成・運営されることが望ましい。

(3) 担任制について

調査対象の先進大学15大学中、担任制の実施が採用実施されている大学は10大学であった。名称はクラス担任制、教員チューター制、ナビゲーター制、アドバイザー制等である。本学においては、初期導入ゼミが担任制役割として期待されるところだが、ゼミは単位認定が絡むことで学生との関係構築のひとつのネックとなる。先進大学の担任制実施状況からも、また、さらに、学生の立場に立った相談の必要性等を考えれば、本学においても初期導入ゼミ以外の別途担任制をとることが望ましいといえる。現行の学生相談制度の有効活用を図ることによって、現在よりも多くの学生支援や効果を期待することはできるだろう。しかしながら、きめ細かな学生への対応システムを構築しようとするならば、一人の学生について役割の異なる複数教員による学生ケア・責任体制が望ましいと考えられる。

(4) 初期導入ゼミに関するFDの実施へ

全学的なFD実施は予算措置も伴うこともあり、大学全体での検討会議を経ていくことが必要であるが、少なくとも、初期導入ゼミ担当者間で前期終了時、および、後期終了時において意見交換会等の場の設定が必要であろう。また、後期における意見交換会では次年度の担当者も含むことが望ましい。なお、先進大学で取り組んできた具体的なFDの一例としては、初期導入ゼミ担当者相互のゼミナール参観等があげられる。

**第3節 平成17年度の実践例**

ここで紹介するのは一教員の1年間の実践例と、受講生の感想である。新入生セミナーを通しての一学生の成長ぶりを紹介しておきたい。

\*\*\*\*\*

2005年度 新入生セミナー目標と課題

地域政策学科 吉居 秀樹

1. 2005年 入学生

2. セミナーの課題と目標

- ① 学問分野横断的な「科学的考え方を」考え、理解するための文献を選択し、それを輪読し、大学の学習に必要な本の読み方、要約の仕方や発表の仕方などを、1年を通じての学習で学ぶこと。
- ② リポート作成の仕方を身につけること。
- ③ 後期からは、グループを編成し、グループごとに発表していくことで、他者の発表を聞き、共通の題材やテーマについて、自己の理解と他者の理解の違いがあることを学ぶこと。

### 3. 課題など

- (1) 導入部 (4月: 大学での学習始めるに当たって, ものの見方の多様性を考え, 多様性を保障し, 実現する社会についての理解する必要性を伝える意図で以下の新聞記事 (英文) を読み, 内容のリポートを作成させる。

新聞記事 (The Times) :

- ① 「2005年1月25日付け: Asylumについて」,
- ② 「2004年12月25日 Queen's Speech」

#### (2) 前期 課題図書

- ① 5月～6月 西垣通『こころの情報学』(ちくま新書, 1999年)
- ② 7月 清水博『生命を捉えなおす一生活ている状態とは何か - [増補版]』(中公新書, 1990年):  
8章【「秩序の自己形成系と情報」;  
9章「新しい自然像 新しい人間像」

#### (3) 夏休み課題図書: 前期課題と後期課題とのつながりを理解するための課題

- ③西村賢一『免疫ネットワークの時代—複雑系で読む現代—』  
(NHKブックス, 1995年)

#### (4) 後期: 夏休みの課題図書の意味を理解するための教材:

10月1週2週

- ・NHKスペシャル (2002年) 「変革の世紀② 『情報革命が組織を変える』」
- ・イギリスTV会社制作 (1995年) 「フラクタル」(10/19)

11月～1月

金子勝・児玉龍彦『逆システム学—市場と生命のしくみを解き明かす—』(岩波新書, 2004年)



\*\*\*\*\*

2005 新入生セミナー 年間のまとめ

塩飽 彰

一年間を通してセミナーで読んだ三冊は、難しかった。けれど、確かに難しかったが、自分のためになったと強く感じます。はじめは、本の内容がわからなくて、出てきている単語の意味を調べて理解しようとするだけで精一杯でした。でも、講義にはしっかり出ていたので、他の人の発表や教授の説明を聞くとなんとなくですが、理解できるようになりました。「サイバーな心」から始まり、「免疫系」、「多重フィードバック」と、三冊の内容は関連があり、一冊目を読んだら、次の本の内容が少し理解しやすかったです。今回読んだ三冊は、はじめは関心がもてませんでした。読んで理解していくうちに、なぜ教授がこの本を読ませたのかがわかってきました。

たとえば、意味を持たない情報があふれ、空虚感を抱えながら、自己の存在価値を見出せなくなっていること。だから、自分で情報を見極めて、意味ある情報を得ることが大切だということ。後期に出てきた「多重フィードバック」は、普段はなかなか意識したりしないが、現在の社会の環境や制度は、多くの「制度の束」からできていることに気づくことができた。一つの制度には必ずその制度（システム）を機能させるシステムがあるのだと。要は、ルールは一つではできおらず、単体では成り立たないということがわかった。さらに、基準値の問題点を述べているところを読んで、見方が変われば、それ自身が正しいかどうかも変わってくるのだということにも気づけたと思う。ここでは、生物の基準値のことを強く述べていたが、経済でも言えることで、基準とは普遍的なものではなく、変化するものだということを意識するようになりました。数値化すれば目に見える形で基準値がわかるが、いつも同じではない。

これから勉強する上で、確かに理解しておくべきである根底の部分であると思いました。社会で生活していくうえで、今まで自分の周りでも機能していたが、気づいていなかった点を今回レポート課題として読んできたことで、多少は理解することができたと思います。さらに、このセミナーのクラスは、レポートを書くことが多かったですが、毎回レポートを書くことで、レポートの要約や書き方を学べたと思います。数回しかレポートを書くことがない他のクラスもありますが、自分は、たくさん書くことで、より練習になり、「情報の処理」の仕方を学べたので、今後レポート課題が講義で出されても焦ることなく取り組めると思います。

大学の勉強は、誰かに頼るのではなく、自分で目標を設定して頑張っていくこともわかつたので、セミナーで学んだことを踏まえて、今後頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

(2006/1/31)

#### 第4章 入学前教育のすすめ

入学前教育の試行は、円滑な高校-大学間の連携を構築し、入学生に対する大学教育へのオリエンテーションを効果的にするための試みとして実施された。本学は一定枠の推薦入学者を受け入れている。推薦入試による合格者は12月に決定され、その後入学までの期間はほぼ4ヶ月間に亘る。その時期を入学に向けて有意義に過ごすことができるようにするための支援の内容と方法を検討課題として取り組んだものである。本年は試みとして、入学まで読むべき課題図書を与え、レポート提出やそれに対する添削、面接を実践した。それらの実践によって、教員とのコミュニケーションを図り、大学入学への不安感を取り除き、入学に向けての意識を高めることを目的としたものである。

## 第1節 推薦入試合格者に対する入学前教育の試みの実践

### (1) 入学前教育の概要

入学前教育の具体的内容として、まず、①実施対象高校<sup>xii</sup>・実施対象者抽出および課題図書を選定、②対象高校への趣旨説明、および協力依頼のための高校訪問（訪問できない高校に対しては依頼書の発送）、③課題郵送（内容への質問事項送付）、④レポート提出（3回）、⑤添削指導<sup>xiii</sup>の実施。以上が入学前の実施項目である。さらに、入学後は、①調査対象者の入学後の面接、②入学後の追跡調査<sup>xiv</sup>を行った。

・実施期間：2004年12月～2005年3月まで（入学後の追跡調査状況によって7月迄）

・具体的目標：「読み込みまとめる力の養成」

・課題図書：金子郁容著『ボランティア—もうひとつの情報社会』岩波新書，1992年

### (2) 入学前教育実施に対する評価・感想について

#### <協力高校の感想>

「例年、推薦できなかった生徒の指導に不十分さを感じておりましたが、今年は貴学に決まった5名が二次試験を受ける生徒たちと一緒に年末年始・土日も返上して自主学習に登校して頑張ってきました。気が弛む場面も多少見受けられましたが、課題に向き合うということと、これからの大学生活を充実させたいとの熱意を5人すべてから感じることができました。

今回のレポートの試行は是非多くの生徒に試されて良いことであると感じました。現在の高校（少なくとも沓岐高校）の教育では大学でなされるゼミ形式の講座はほとんど不可能でありますし、レポート作成にあたって自ら学ぶということについて生徒自身の成長が期待できると感じました。今後もこの試みは継続されることを希望いたします。」

<沓岐高校 進路指導 山口孝 先生<sup>xv</sup>>

<受講した新入生の感想>

【良かったと思うこと】

- ・ 今回の岩波新書の教材を使っのレポートを書いてみて高校ではない課題だったので新鮮な気持ちで取り組むことが出来ました。レポートを書くのは初めての経験でしたが、4月から始まる大学生活へ向けてのやる気が湧いてきました。
- ・ 初め課題と言って本を1冊渡されてレポートを提出するよういわれ、正直戸惑いました。それと同時に大学生になるんだという自覚が出てきました。
- ・ 課題があると聞いたとき大変だと思ったが、充実していた。もし、課題が無かったら何もしなかったと思う。
- ・ 難しかったが読んで行くうちに考えることが楽しくなった。じっくり考えると自分の中の世界が広がっていった。自分の考えは表面的だと感じた。
- ・ 今までむずかしい本を読んだことがなかったが、ひとつのテーマに対していろいろな視点から考えることができた。
- ・ はじめての本が興味深く新鮮だった。
- ・ 文章をどのように書いていいのかわからなかったが、先生と相談しながら書いていった。自分がボランティアをしたときの気持ちが重なった。
- ・ 推薦合格後、大抵遊んでしまうが、レポートに取り組んできて大学へ入る準備ができた。
- ・ ボランティアは中学、高校とやってきたが、自分には合わないと思っていた。しかし、今まで持っていた自分のボランティアに対するイメージが変化してきて、いろいろな考えもあるとわかり、自分の世界が広がった。
- ・ 多くレポートを書き練習していく必要がある。このことがわかっただけでもレポート作成の宿題は収穫になった。

- ・ボランティアは自分がしてあげるといふより、自分が受け取ることになると思った。

### 【大変だったこと】

- ・こんなふういきちんと本を読んでまとめることは、とにかくむずかしく感じた。知らない言葉もあり、飛ばして読んだりしたが、これからはちゃんと読んでいきたい。
- ・課題図書を与えられその感想をレポートにして書くことが、自分が考えていたよりも難しいことを知った。
- ・期限内提出が大変だった（同じ高校内でまとめて提出していたので遅くなると友人に迷惑をかける為）。
- ・とくに3回目の提出内容が、抽象的すぎて理解がむずかしかった。
- ・第一回目の提出がテスト期間と重なりちょっと大変だった。
- ・文章を書くのが苦手で、レポートを書くこと自体が初めてだった。試行錯誤を繰り返しながら自分なりに書けたと思う。
- ・レポートを書くのが初めてでどのように書いていいのかわからず、「ボランティア」の本文を忘れて自分勝手な文章を書いたり、本の主題から脱線したり、よく調べもせず間違った情報について書いてしまったりと、いろいろ後悔も残っている。
- ・興味あるところと無いところが両極端でそれを広げていくのが難しかった。
- ・今まで知らなかったことを知ることができた。
- ・昔の哲学者の話は意味がわからなかった。
- ・読みやすい部分と読みにくい部分あわせて読むのが大変だった。
- ・書くことが苦手で何を書いているのかわからなくなることもあった。
- ・本自体は面白かったが、もっと遊びたかった。
- ・むずかしいところは頭に入らなかったが、具体例のところはわかり

やすかった。体験談のところは書きやすかった。

- ・合格した喜びと一緒に宿題が出され「勘弁してほしい」と思った。今まで新聞の課題に取り組んだことがあったが、本1冊というのは初めてだったので難しかった。

## 第2節 「推薦入試合格者に対する入学前教育の試みの実践」に関する今後の課題

今回試行した「入学前教育の試み」は、新入生の感想からも協力高校からの意見からも、当初の目標である①教員とのコミュニケーションを図り入学へ向けての意識を高める、②読み込みまとめる力の養成、という両方の課題を達成していると評価でき、試行から恒常的实施への移行を提言としたい。なお、移行する際には、次のような事項について検討していくことが望ましい。

### 1) 入学前教育内容与方法についての検討

どのような教育方法を行うかについて、前年度の反省を踏まえ、毎年検討されることが望ましい。

### 2) 課題図書を選定について

課題図書選定は・出す側が内容についてよく把握しているもの。

- ・比較的取り組みやすい内容であること。
- ・新書版等の安価で手に入れやすいもの、等が望ましい。

### 3) 必要担当教員数・選出・依頼について

- ・推薦合格者決定前に実施体制へ入ることが望ましい
- ・平成17年度は、推薦入試合格者全員を対象とした入試前教育継続実施の旨を既に各高校へ通達してある為、早い段階での準備体制が必要である。
- ・実施回数：2回から3回が効果的
- ・推薦合格者数に対する教員数の検討。  
本年度試行では、19名に対して教員4名で対応(ほぼ一人5名担当)。

## おわりに

本稿は平成16年度長崎県立大学学長裁量分指定研究「初期導入ゼミ実践に求められる『標準的教育内容』の機能開発研究」報告書を基に、大幅に加筆修正をしたものである。上記報告書提出から、既に1年が経過した。本稿で提言した「標準的内容」の提言項目は、平成17年度から「新入生セミナー・ガイドブック」(学生用)「新入生セミナー・ガイドライン」(教員用)として手引書内容に反映されている。入学前教育をうけ、平成17年度から必修となった新教育体制の新入生セミナーを受講した学生たちは、現在、1年生を終了する時期を迎えている。新しい制度の教育効果の検証と確認の意味でも、新入生セミナー導入以前と以後の学生たちの様子については、今後も継続して把握していく予定である。この一連の取り組みの成果が目に見えた形になるのは、卒業生として彼らを送り出す2年後であろうと期待を抱いている。

(文責：山田)

## 資 料

1. 訪問および電話等によって調査した先進大学一覧 **資料 1**
2. 先進大学訪問に際しての共通質問項目一覧 **資料 2**
3. フレッシュパーソンセミナー担当教員へのアンケート **資料 3**
4. 7月実施の「フレッシュパーソン・セミナーアンケート」結果について **資料 4**

資料 2

学長指定研究「初期導入ゼミ標準教育内容」

2004. 7. 26

訪問期日:

訪問大学名:

窓口担当者名:

大学シラバス等の資料:

先進大学訪問に際しての共通質問項目一覧

\* 初期導入ゼミあるいは新入生ゼミ実施 (有・無) について

\* 目的・方法論について

1. 初期導入ゼミは必修? or 選択? (その理由と単位配分)  
必修の場合: 単位認定「不可」の場合の措置
2. クラス編成について (学生の自由選択 or 割り当てクラス編成)
3. ゼミ授業評価について (学生側&教員側の評価は?)
4. 大学の取り組み方 (教員全員 or..., その理由)
5. 担当教員数 (上記4の設問と関連して...)
6. ひとりの教員が担当する学生数 (その理由)
7. クラス担任制との関わり
8. 共通指導内容
9. 担当されて良かったと思われる点
10. 担当されて改善を要すると思われた点
11. 初期導入ゼミで少なくとも最低限必要だと考えられる指導内容・項目



資料 3

2004. 6. 23

フレッシュパーソンセミナー担当教員へのアンケート

長崎県立大学教員：指定研究グループ  
山田千香子・綾木歳一・新川本・西村千尋

現在、長崎県立大学平成16年度学長指定研究テーマ：「初期導入ゼミ実践に求められる『標準的教育内容』の機能開発研究」について取り組んでいます。そのなかで、これまでにフレッシュパーソンセミナーを担当された先生方に、担当された感想やご自分の授業評価等について把握するため、アンケートを実施することになりました。お手数をおかけし申し訳ございませんが、下記の質問についてご回答下さいますようお願い致します（最も近いと思う番号に○をおつけください）。なお、記入方法は無記名です。7月7日（水）までに回答用紙（本用紙）を学生課教務係へご提出下さい。

1. フレッシュパーソンセミナーを担当されて良かったと思うこと。

1. 学生と授業内容についての話をする機会があった。

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

2. 学生にとって自ら調べて学ぶ機会があった

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

3. 学生にとってプレゼンテーションの機会があった

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

4. 学生にとって学内施設（図書館等）を活用する資料収集方法を学ぶ機会があった

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

5. 学生にとって多くの友人をもてネットワークを作れた

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

6. 学生にとって他者に対する態度を養うことができた

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

7. 学生にとって社会に対するものの見方を養うことができた

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

8. 学生にとって人生観を育むことができた

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

9. 総合的に見てフレッシュパーソンセミナーは、学生にとって有益でしたか

- ①強くそう思う      ②かなりそう思う      ③ある程度そう思う      ④あまりそう思わない      ⑤全くそう思わない

2. フレッシュパーソンセミナーを担当されて、上記項目以外で良かったと思われる点。

3. フレッシュパーソンセミナーを担当されて改善を要すると思われた点。

4. フレッシュパーソンセミナーで少なくとも最低限必要だと考えられる指導内容あるいは指導項目。

資料 4

2004. 10. 1

7月実施の「フレッシュパーソンアンケート結果」について

履修学生・教員の全体結果から

1. 総合的に見てフレッシュパーソンセミナーは、あなたにとって有益でしたか

肯定的回答 ①強くそう思う ②かなりそう思う ③ある程度そう思う

学生 86.8% (①32.3+②25.6+③28.9)

教員 100% (①20.0+②70.0+③10.0)

履修して良かったと思うこと

<満足度が高い順から>

1. 自ら調べて学ぶ機会があった

93.6% (①26.7+②35.7+③31.2)

教員 100% (①30.0+②70.0)

2. プレゼンテーションの機会があった

84.7% (①36.5+②22.6+③25.6)

教員 100% (①50.0+②40.0+③10.0)

3. 教員と授業内容についての話をする機会があった

78.2% (①20.7+②19.5+③38)

教員 100% (②70.3+③30)

4. 学内施設(図書館等)を活用する資料収集方法を学ぶ機会があった

76.2% (①24.4+②16.5+③35.3)

教員 90% (①10.0+②40.0+③40.0)

5. 他者に対する態度を養う事ができた

72.2% (①7.9+②22.2+③42.1)

教員 87.5% (②25.0+③62.5)

6. 社会に対するものの見方を養うことができた

69.9% (①8.6+②17.7+③43.6)

教員 80% (②40.0+③40.0)

7. 多くの友人をもてネットワークを作れた

63.5% (①12.4+②14.3+③36.8)

教員 100% (②40.0+③60.0)

8. 人生観を育むことができた

54.2% (①7.9+②15.8+③30.5)

教員 90% (②10.0+③80.0)

\*上記8の項目について：将来設計について考えて「人生観を育む…」ということであって欲しいが、具体的にどのように取り組んだらよいかむずかしい。具体的にどう講義を聴くか、どうノートを録るか、スキルの点ではつかみやすいが、人生観や将来設計のようなものが背景にあって、そこに取り組むやり方が大切。そのような点が課題となると考えられる。

9. 参加ゼミ員の人数は 10~20名の間

(①2.3+②14.8+③34.5+④29.2+⑤19.3)

【参考文献】

- アスティオン編集委員会『アスティオン61－日本の教育を考える－』阪急コミュニケーションズ 2004
- 有本章『大学教授職とFD－アメリカと日本』東信堂, 2005
- 有本章編『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部 2003
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部 2001
- 京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育学』培風館 2003
- 高等教育研究会編『大学を学ぶ－知への招待』青木書店 1996
- 佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店 1995
- 林義樹『学生参画授業論－人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法』学文社 1994

【注】

- i 1単位を認定する捉え方として、基本的に「45時間の学習＝15時間の授業＋30時間の自己学習」という計算が為される。
- ii 18歳人口の減少と大学進学率の増加が進むなか、我が国の大学・短期大学進学率は平成17年度に過去最高となり、初めて5割を越えた(51.5%)。
- iii 医学部の学生のなかにも、物理学や化学を勉強していない学生は少なくない。これは、医学教育が成立する前提である学問的素養の欠落とイえる。また、今日の理工系学生の4人に1人は「物理」を高校で学んでこないという状況もある。
- iv 初年次においては、学科・学部の壁を越えた幅広い視野と教養を身につけること目標としている。
- v 本学における初年次導入教育科目の名称は、平成15年度開講まで「フレッシュパーソン・セミナー」という名称で、1年前期(1単位)に位置づけられた科目であった。平成17年度から「新入生セミナー」という名称に変わるとともに、通年科目(2単位)となっている。
- vi 肯定的回答とは(①強くそう思う＋②かなりそう思う＋③ある程度そう思う)の3つの項目を指しており、ここではその合計である。
- vii 1～3の項目について認識のズレが起こる理由としては、個人が発表する回数等に関する量的な問題が考えられる。教員側としては「学生全員に発表の場、話し合う場を与えている」と考えられるが、学生側の立場からはそれだけでは「満足するものではない」という質的内容が求められているのではないだろうか。
- viii 学業に支障がおこる第一歩は、朝起きられなくて遅刻する等であり、数多く見受けられる。これらの対応には、入学後の早い段階で、初期導入ゼミ教員等からの声かけや基本的なコミュニケーションの蓄積が有効のようである。その他、検討すべき状況

は、入学後に「不適応状態」に陥る学生数が毎年増加しつつある点である。休学の半数、そして退学はそれに関連している。その背景には、大学のユニバーサル化→不本意入学の学生増加の傾向がみられ、学習意欲の低さからの不適応等が考えられる。学業への動機づけの推進への取り組みが、早急に必要とされている。学ぶためには、自らの動機づけと主体的な意欲とがなければならないからである。

- ix その際に、学生が大学内の教員に各自のテーマに関連した質問をする場合に、研究室訪問の仕方なども理解させておくことも必要とされる。
- x 本学では基本的に「情報リテラシー」の講義で学ぶ体制になっているが、ゼミでも具体的課題研究の際に指導が求められる。
- xi 「全国大学満足ランキング」『AERA』NO43. 2004 34-38頁。
- xii 実施高校の選出は下記の理由によって抽出された。県内のできるだけ多種多様な高校形態から抽出することを前提として、普通科、商業科、大学近隣の高校、環境の異なる離島の高校、地元の商業高校、農業高校、実業高校等である。
- xiii 教員4人全員が、提出者全員のレポートを読みコメントをつける。担当高校を決め、担当教員が最終的に4人のコメントをひとつにまとめて記入する方法を3回実施した。
- xiv 入学後の対象者継続調査として、単位履修状況調査を、前期の履修成績が出された10月に実施したところ、対象者全員の単位修得状況は非常に良い結果を示した。それは、個人の資質に負うところが大きいと考えられるが、新入生セミナーのスタートや入学前教育にも関連しており、その成果の一つということも否定できない。今の段階では回答は出せないが、今後も継続して教育効果との関連をみていきたいと考えている。
- xv 所属校および役職については、調査時の2005年3月現在としている。